

慈心力

原 実

ここに標題に掲げた『慈心力』の漢訳語に筆者が最初に出会ったのは今から約一年前善見律毘婆沙に於いてであったが、論述に先立って本稿成立の経緯に就いて一言し、以て教示を受けた方々への感謝の辞とする。

1998年度本学付属研究所の客員研究員として滞在した Würzburg 大学の Max Deeg 博士は1999年2月、離日に際して *Legende von den tausend Königssöhnen* と題する原稿を筆者の許に提示された。筆者はそれを通読する間に *māmsa-peśi* の合成語に遭遇し、仏典に叙事詩 *Mahābhārata* の *Duryodhana* 誕生伝説に類似した物語のあるのを発見して別に *māmsa-peśi* と題する一稿を草した。

その折、その研究線上に位していた平川彰博士の善見律毘婆沙の英訳 (*Shan-Chien-P'i-P'o-Sha, A Chinese version by Saṅghabhadra of Samantapāsādikā, Poona 1970, p.286, No.47*) を参照する機会があって、この『慈心力』 (*intense feelings of love*)¹⁾ の概念の存在する事を知った。しかし『慈心力』(以慈心力故。両手母指自然出乳 大正 24、p.743b 24-25) を載せるこの漢訳の相当部分は Pali 原典に欠如していたから、その限りでは原語の確定が不可能となった。但し類似の物語は *Paramatthajotikā* (1 p.158 6 ff.) にも語られているので、それを手掛かりに原語を辿ると、そこには唯 *putta-sineha* (息子への愛情) の合成語が見出されるのみであった。この *putta-sineha* は、しかし、『慈心力』の原語ではあり得ないので、筆者はこの漢訳『慈心力』の原語が一体何であるか、その時確定する事が出来なかった。折しも同年4月上京された L.Schmithausen 博士に筆者はこの『慈心力』の原語が何であるかを訊ねた時、博士は即座に *maitrī-citta* であると答えた。その後筆者は同氏の *Maitrī and Magic* (Wien 1997) を精読し、別の視点から更に資料を蒐集して本稿となったが、この間本学の同僚 H.Durt 博士、並びに早大大学院の筆者の演習に参加されていた伊藤千賀子氏に啓発される所多大であった。

人類がこの地球上に生を営む間に自然の猛威を克服し、危険な動物を調教して来た道程は人間の文明の発達と部分的に軌を一にして、それは従来人間の『知性の営み』の過程として評価されて来た。ところが近時環境問題が論じられるに及び、人間とそれを取り巻く自然、就中動物、植物との関係が問題とされるようになって、漸く自然破壊が警告され、自然との調和の必要性が強調されるに至った。人間が自身の都合によって自然一般を破壊する時、後者は必ず前者に報復する道理である。ここに人力を遙かに超えた自然の力が再認識され、生体系の破壊が所詮は人類の破滅に連なる事が警告されるようになった。

然らば人知を超えて猛威を振るう自然、並びに有害危険な動物に対して元来人間はどのように対処して来たであろうか。現在でこそ人間の環境破壊が問題とされるが、もと人間は自然の脅威に恐れ戦き、それを畏敬し又慰宥して共存の道を探究していた筈である。就中、Schmithausen が指摘するように、未だ阿羅漢位 (arhat) に達していない出家修行者が独り荒野にあって修行に励む間に彼等は自然の猛威、猛獣の危険に曝されていた²⁾。その様な場合彼等はそれらにどの様に対処していたのであろうか。

概して『自然』の威力に対しては『超自然』の力を以てせねばならぬ道理であるが、この種の『超自然力』の発動に彼等はいかなる手段を用いていたのであろうか。『超自然力』の中には苦行者の行使する『神通力』の類も数えられ、梵文学の随所には彼等行者の住む庵 (tapo-vana) に不具戴天の敵も和合共存していた様が描かれている³⁾。同様な事が仏典にも言及されるが⁴⁾、仏伝には有名な『醉象調伏』の故事も語られる。然らばこれら『超自然力』の発動はそもそも如何なる構造を有していたものであろうか。

世に『八難』と称せられるものの中で、飢、渴、寒、暑等の自然のもたらす災害を回避するために古く人間は神々の加護を求め、雨乞い等の『祭式』を催し、又猛獣の難を避ける為に『呪文』『真言』の類を用いた⁵⁾。これら『超自然力』の体系の中の或るものは所謂『科学以前の科学』(vorwissenschaftliche Wissenschaft) となり、古代人の思考の型を形成するものとして研究者の興味をそそった⁶⁾。脅威の度合い、危険度が高け

れば高い程それだけ益々それらは慰宥、崇拜の対象となる道理で⁷⁾例えば毒蛇の危険に曝されていたインドに在ってそれは竜神崇拜の隆盛を結果した⁸⁾。

凶暴な動物に対する今一つの『自己防衛』の手段に、人間が彼等と互いに他を害しない一種の『不可侵条約』(peace-treaty)⁹⁾を結んでそれを履行する事がある。この人間と有害動物との『不可侵条約』の締結には、動物にも人間と同様な『心』の存在する事が前提されており、人間の側よりするその履行は『不殺生』の実践に他ならない。人間が他を害しない不殺生の『心』を持てば、相手は動物を含め、自ずとそれに『感応』して人間を襲う事はないが、逆にこの『不可侵条約』を破棄して相互信頼を裏切る時、その様な行為は相手から相応の『報復』を呼ぶ道理である。

ところで『不殺生』(ahimsā)が動物植物を害さずとなす人間の側からする休戦的、消極的な営みであれば、その対局に位する積極的概念も存在してよい筈である。その実践の一つに仏典に言う『四無量心』『四梵住』の概念があり、又その中でも『慈』(mettā, maitri)の概念が従来特に強調されて来たが¹⁰⁾、それを『神秘力』『魔力』の視点から捉える試みもこれまで西洋の研究者の間では行われてきた¹¹⁾。

消極的に互いに他を害しない『不殺生』から、より積極的に互いに他を『慈しみ』愛し合う時、それは『自己防衛』へのより確実な保証となる。互いに他を害し合い得る危険な関係にある両者の相互利益となれば、『同盟』『共存』には殊更一層の意味が付与される道理である。

何れにしても人間がこれら危険な自然や動物に対して如何にして自己保全を計ったか、そしてそれが実際にどのように機能していたかの問題を、以下に『慈』の概念を中心にして文献に基づいて考察したいと考える。

I

人間が心に『慈』を念ずれば、それが特殊な力となって奇跡をもたらす事は、本稿冒頭に掲げた漢訳『慈心力』を盛る物語によって知られるが、それによると男性修行者であっても嬰兒を慈しみ、己が内に『慈心力』を

開発する者は、その親指より乳を湧出せしめて自ら彼等を養い得たと言われる(以慈心力故。両手母指自然出乳)。

既述のこの物語は、Pali 文献にあって Licchavi-Vajji と名付ける王族武士階級の起源を説く、有名な Vesāli 都城建設の因縁物語の中に言及される¹³⁾。物語はもと Buddhaghosa の創作であったと思われ、Samantapāsādikā にも言及されるが、現行の Pali 校訂本はその部分を省略している。但し同類の物語は Pali 文で彼の Majjhima-Nikāya への注釈、Papañca-sūdanī に見え、略々同文で綴られるものも彼の Khuddakapāṭha への注釈、Paramattha-jotikā に見える。翻って漢訳仏典を見るに、Samantapāsādikā の漢訳善見律毘婆沙は上の二つの Pali 文献と略々同じ内容を極めて忠実に再現しているので、以下に両者を参照しつつその物語の冒頭部分の概要を提示する。

『ベナレス王の第一妃が懐妊し、王は妃に可能な限りの介護を施したが、誕生したものは赤子に非ず、赤い肉塊 (maṁsa-pesī) であった。他の妃達が黄金に輝く王子を産んだのを見て第一妃は恥じ、王の寵愛を失うのを恐れて密かにその肉塊を王印を付した箱につめ、ガンジス河に流した。その折、精霊達は金板に『ベナレス王第一妃の息』と記してその箱に添えた。

時経てその箱詰め肉塊は下流に住む苦行者の眼にとまり、彼はその文字を読んで箱を開き、その肉塊に腐蝕の悪臭のないのを見て、それを生ける胎児 (gabbha) と観じ、自庵に持ち帰って大事に育てた。半月後肉塊は二つとなり、更に半月後その各々に頭と両手、両足に相当する五つの脹らみが生じた。それから更に半月後、それらは黄金の男子と女子となった。ここに苦行者が彼等に父親の愛情を感じずると、その親指から乳が迸り出た。その乳によって彼等は次第に成長したが、家庭を持たぬこの苦行者の、離乳期を越えた二児の扶養の苦勞を見て取った牧牛者達は、二人の子供を引き取って養育した』

一読して明らかな様にこの物語は多くの問題を含んでいる。先ず、肉塊の誕生は既述の通り叙事詩 Mahābhārata に見える Duryodhana 以下の Kaurava 百王子の誕生物語を想起せしめ¹³⁾、同類の物語が Avadāna-śataka 68 に見える事は古く L. Feer の指摘した通りである¹⁴⁾。生まれたばかりの赤子を箱詰めにして川に流す物語は Vālmiki Rāmāyaṇa を除く諸種の

Sitā 誕生物語 (そこで彼女は Rāvaṇa の娘とされる) に見え¹⁵⁾、それは比較文学上有名な『貴種流離譚』の物語 Motif に連なっている¹⁶⁾。しかしこれらの問題には今は触れず、この Pali 原典に対応し、且つ問題の『慈心力』の語の現れる漢訳善見律毘婆沙卷10の相当箇所の前後を示せば以下の如くである。但し漢訳仏典は Pali 原典と必ずしも文言が一致していない。

男色如黄金。女色如白銀。道士見如是相己。心生愛重。如自子無異。以慈心力故。兩手母指自然出乳。一指飲男一指飲女。(大正24、p.743b 22-25)

この二人の嬰兒に父親の愛情を感じた苦行者の両親指から乳が迸り出て、彼等を養育する物語に在って、この奇瑞を可能ならしめたものは漢訳で『慈心力』とされるが、Pali原典がこの部分を欠いている事は既述の通りである。そこで Paramatthajotikā 1 の原文を検索すると以下に通りである。

Atha tato addha-māsaccayena ekā maṁsapesi suvaṇṇa-bimbasadiso dārako, ekā dārikā ahosi. Tesu tāpasassa putta-sineho uppajji aṅguṭṭhakato c'assa khiram nibbatti. Tato pabhuti ca khirabhataṁ labhi (Khuddaka-pāṭha with its commentary Paramatthajotikā 1 p.159 lines 6-10, ed. by H.Smith, London 1959)

該当部分には putta-sineha の語 (paternal affection、Law p.19) があるのみで、『慈心 (力)』(maitrī-citta)に相当する語はここには見当たらない。

II

『慈心』に特殊な『力』が宿り、それが父親の授乳という奇瑞をもたらす事は上の物語に見た通りであるが、『力』を発動せしめるものは又『慈三昧』(maitrī-samādhi)とも、『修慈』(maitrī-bhāvanā)とも、又『梵住』(brahma-vihāra)とも呼ばれ、且つその現象形態は多様を極めてい。Pali 文献にあって古く Aṅguttara-nikāya IV.150は『安眠』以下の8功德 (aṭṭhānisamsā) を説くが¹⁷⁾、多くは11 (ekādasānisamsā) を

挙げる¹⁸⁾。今、『慈』の涵養に10種あり (pp.296-306)¹⁹⁾ となす Visuddhi-magga によって『慈』に帰せられる11種の効能、功德 (ānisaṃsā) を示せば以下の通りである (pp.305-306)。

- | | |
|--|--------------------------|
| 1. sukhaṃ supati | (安らかに眠る) |
| 2. sukhaṃ paṭibujjhati | (安らかに目覚める) |
| 3. na pāpakaṃ supinaṃ passati | (悪夢を見ず) |
| 4. manussānāṃ piyo hoti | (人々より好かれる) |
| 5. amanussānaṃ piyo hoti | (人間以外の者より好かれる) |
| 6. devatā rakkhanti | (神々の加護あり) |
| 7. nāssa aggi vā visamā vā satthamā vā kamati | (火、毒、武器も不可侵) |
| 8. tuvaṭṭamā cittamā samadhiyati | (速やかに心集中成る) |
| 9. mukha-vaṇṇo pasīdati | (顔色冴える) |
| 10. asamāmulho kālamā karoti | (死期に惑わず=終不横死) |
| 11. uttarim appaṭivijjhanto brahma-lokūpago hoti | (最高阿羅漢位に至らざるも、 梵界に赴く) |

(VM. 305 29-306 1. Cf. 311 31-314 8)²⁰⁾.

漢訳増壹阿含卷47 (大正2 806a20-22)も11果報を挙げているが (臥安、覺安、不見悪夢、天護、人愛、不毒、不兵、水火盜賊終不侵枉、若身壞命終生梵天上²¹⁾)、上の11と必ずしも一致しない。又、阿毘達磨大毘婆沙論80には

『住慈定者。刀毒水火皆不能害。必無災横而致命終……』

以慈三摩地是不害法故…… 慈三摩地威勢大故』(大正27 427a6-9)

とあり、阿育王伝4の摩田提因縁にはその『慈心三昧』が能く怒れる龍の暴拳を抑え (大正50 116b)、又二龍を抑えたとする同5の商那和修因縁には

『慈心三昧法虫毒水火不能傷害』(大正50 117b7-8)

と記載される。更に阿育王経7の『末田地因縁』『舎那婆私因縁』には、

『入慈三昧 火不能燒 器仗毒害 不近其身』(大正50 156 a 21-22、157a 5-6)

の文言が繰り返されが²²⁾、大智度論はその功德に5種（仏説入是慈三昧。現在得五功德。入火不燒。中毒不死。兵刃不傷。終不橫死。善神擁護 大正 25 211a25-27) を数える²³⁾。これらの中でもなかならず『火難、毒難、兵難』を免かれるとなすものは、三者一括して Pali 文献においてしばしば言及される所である²⁴⁾。

III

大智度論にいう『慈五種功德』の中『中毒不死』に相当する『慈心能く毒蛇の毒を排す』となすものは『厄除けの護符』(Snake-charm) の由来を説く仏典物語に見られる。

E.Waldschmidt が校訂した梵文 Upasena-sūtra (漢訳、雜阿含經卷 9 No.252 優波先那、大正 2 60c-61b)²⁵⁾ は近時 L.Schmithausen が更に関連章句を蒐集して比較し、分析した所であるが、彼の説く所に従ってその構成を見るに次の如くである。

(1) 比丘 Upasena (優波先那) が王舎城の火葬場 (śmaśāna) に近い或る小洞の中に在って独り瞑想に耽っていた時、毒蛇²⁶⁾ がその身体の上に落ちた。彼は比丘達を呼んで毒蛇に噛まれた事を伝え、至急小洞より外に連れ出してくれるよう頼んだ。その折、程遠からぬ樹下に坐していた舍利弗はこれを聞いて彼に近づいたが、その顔色、感官の様子に平常と全く異なるのを見て、にも拘らず Upasena が何故に非常事態を宣言したのか彼に訊ねる。Upasena は平常と変わらないのは自分が一切に対して自我意識を持たぬ故であると答えたが、舍利弗が彼を小洞より担ぎ出すに及んで、毒は忽ち体内に廻って彼は命終した。

(2-1) 舍利弗は四つの偈を詠んで彼の葬儀を済ませ、仏の許に到って一切を告げると、仏は、若し Upasena にして次下に述べる gāthā と mantrapada を唱えていたらこのように毒が身体を廻る事なく、従って命終することもなかったであろうと言った (sacec chāriputra upasenasya kula-puttrasya tasmim samaye imā gāthāḥ pratyabhāsyamīta imāni ca maṁtrapadāni nāsyāśīviṣaḥ kāye 'kramiṣyan nāsyā kāyo viśariṣyat... Waldschmidt p.341 [21] = 仏告舍利弗。若優波先那誦此偈者。則不中毒。

身亦不壞... [大正 2 61a23-4])。ここに舍利弗がその *gāthā*, *mantra-pada* とは如何なるものかと問うに及んで、仏は『厄除けの偈』(Schlangenzauber) を唱えたと伝えられる。

(2-2) Schlangenzauber (Snake Charm)

(2-2-A) 慈心偈(Maitri Verses)

その *gāthā* とは、複数処格に *maitrī me, me maitrī* (我に慈あり) の文言を含む所謂 Maitri-verses と称せられるもので、この慈の対象とされる複数処格には (a) Dhṛtarāṣṭra を初めとする各種蛇(龍)王族(23-24) (b)無足、二足、四足、多足の生類、(c) 海中の龍(26ab)、(d) 動不動の一切生類(26cd) が見え、最後は (e) 一切有情が幸せで無病息災たらん事を祈念して終わっている。尚、この偈の部分は吹田隆道氏によって邦訳されている²⁷⁾。

(2-2-B) 真実語の偈

(a) この偈は、文意尚詳らかにし得ぬ憾なしとしないが、Waldschmidt に従えば次の通りである。

『我が常にここに在って修行する際に、毒蛇が我が命を侵す(事なし??)、この真実にかけて、又(我が) 教示者〔仏〕がこの世の最上者たる(真実にかけて)、我が身体に毒の到る事なきよう』

(b) 仏が貪、瞋、痴の所謂『三毒』を殺したという真実語により、又仏法僧の『三宝』に事寄せて、この蛇の『毒』も殺されるように祈念する。

(2-2-C) 呪文

(2-3) 仏は上記の2-1で述べた事を繰り返す。舍利弗は、以前にこの *gāthā* と *mantra-pada* が仏によって宣言されていなかったから、その時それが Upasena の頭に浮かぶ術もなかったと言う。舍利弗は仏のこの教えを受持して歡喜したと伝えられる (Waldschmidt pp.334-338)。

この物語は Schmithausen の言う様に次の二つの異なった部分より構成されている。

(1) その前半部分は、比丘が一切の我執を去って修行している限り、彼が蛇の毒に冒されぬ事、即ちたとえ毒蛇に噛まれても彼の顔色、感官に何

の異常もなき奇跡を物語る。比丘自身は、しかし、修行の場を離れるや否や命終した。ここに修行者 Upasena には死に対する恐怖は微塵も認められない。

(2) これに反して後続の物語には死への恐怖が前提され、生き永らえんとする阿羅漢位に達していない俗人の希望、祈願が顕著である。そしてそこには毒蛇の害を防ぐための『慈心による呪文』が仏自身の口から説かれている。そしてそれは仏の最勝性を真実となす真実語、又蛇の毒にからめて所謂三毒を仏が払った故事によせて今一度真実語を説く。

この後半部分を読む者は毒蛇を初めとする動物への (loc.) 慈心の遍満、或いは彼等との (Inst.) 友愛 (maitrī) が、相互の安全保障の役割を果たしているのを看取する。人間が慈心を行使すれば、危険な動物もそれに感応してこちらに危害を加えることはない。慈心を以て彼等を遍満し、更に彼等を含む一切生類の無病息災を祈念し、加えてそれを真実語の力を借りて強化する上の文言を唱えれば、それはそのまま『護符』となった。

この Upasena-sūtra 後半部分が寧ろ別の系統に由来していたであろう事は Schmithausen の指摘した通りである (pp.17-23: Khandha-paritta)。Pali 律蔵に在って比丘の名は特定されないが、彼が蛇に噛まれて死んだ時、仏がこれを聞いて上と同様な述懐をする。そこには『慈心』(metta citta) の語が現れるが、略々同類の文言は Aṅguttara-nikāya 2.72-3にも見える。

na ha nūna so bhikkhave bhikkhu cattāri ahi-rāja-kulāni mettena cittena phari. sace hi so bhikkhave bhikkhu cattāri ahi-rāja-kulāni mettena cittena phareyya na hi so bhikkhave bhikkhu ahinā daṭṭho kālaṃ kareyya (Vin. 2.109.31-35)

『比丘達よ、この比丘は四つの名門蛇王を慈心を以て遍満せざりき。若しこの比丘にして四つの名門蛇王を慈心を以て遍満せば、彼は蛇に噛まれて命終することなかりしものを』

仏はこの機会に『これら四龍王族を慈心を以て遍満する事を以て (以後) 自己防衛 (atta-gutti, atta-rakkhā) のために、自護呪 (atta-paritta)²⁸⁾ をなす事を許す』と言ったと伝えている。この『自護呪』は Virūpakkehi

me mettam (我に広目達との慈 [=友情、友好的契約] あり) に始まる章句を載せる (処格に非ずして具格となっている事に注意 Cf.Schmithausen p.37) が、上と異なるところはその後に mā mam apādako himsi (無足のものは我を害することなかれ) に始まる対応句を載せ、そして最後に一切有情、一切生類が吉祥 (bhadra) を見 (passantu)、諸々の害 (pāpā) の到来せぬよう祈念して Snake-charm を完結させている点である。ここに我々は修行者の側の慈心 (loc.) 乃至友情 (inst.) の実践と、それに対応する毒蛇の側の危害を加えぬ事との間に、一種の不可侵条約の締結、契約的交換条件の提示の如きものを看取する。尚、ここに見られる『遍満』の原語 pharati の意味については付論で簡単に言及するであろう。

類似の文言は Khandhavatta-jātaka (203, J.2.145)²⁹⁾ に見えるが、そこには『慈心の遍満』の替わりに『慈心の修習』の語 (mettā-bhāvanā: mettam bhavetvā 2.145.4, mettam bhāveyyātha 16, mettam bhāvetha 17, mettam bhāvanam 27, mettā-bhāvanam 146.7) が現れ、散文中には『三宝』の概念も見えて物語全体の口吻は上の梵文仏典に近似している印象を与える。

IV

大智度論は『中毒不死』に次いで『兵刃不傷』を挙げているが、飛び道具 (śastra) が慈心を有する者を害さぬ事実は幾つかの仏伝や Jātaka の物語によって立証される。

(4-1) Visuddhimagga 第12章には各種の『神変』 (iddhi) が説かれるが、その定遍満神変 (samādhi-vipphārā iddhi) の項に Udena 王の第一妃 Sāmāvati の物語が語られる。バラモン Māgaṇḍiya は自分の娘を第一妃の位に据えんと欲して、Sāmāvati の琴の中に毒蛇を投入してそこに潜ませ、以て彼女に王暗殺の企みのある事を王に讒言した。怒った王は彼女を殺さんと弓を執ってそれに毒矢を番える。しかし、妃が侍女と共に怒れる王を慈を以て遍満するや、王は矢を放つ事も、弓から外す事も出来なくなると伝えられる。

Rājā taṃ disvā kupito: Sāmāvatīṃ vadhissāmī ti dhanuṃ āropetvā
visa-pitaṃ khurappaṃ sannayhi. Sāmāvatī sa-parivārā rājānaṃ
mettāya phari. Rājā saraṃ neva khipituṃ na oropetuṃ sakkonto
vedhamāṇo aṭṭhāsi (VM. pp.381 22-25)

『王はそれを見て怒り、Sāmāvatī を殺害せんと弓を取り毒矢を番えた。彼女は侍女を従え、王を慈を以て遍満した。すると王は矢を放つ事も、外す事も出来ずに震えるのみであった』

同じ Udena 王妃の物語は Buddhaghosa の Aṅguttara-nikāya 注 Manorathapūraṇī に語られ、そこでは mettā-pharaṇena rājānaṃ pharattha の表現が用いられている (vol.1 p.442-43) が、Dhammapadatthakathā はそれを別様に語っている。

So tassā mettānubhāvena paṭinivattitvā āgata-maggābhimukho va
hutvā rañño hadayaṃ pavisanto viya aṭṭhāsi

(Dhammapadaṭṭhakathā I p.217 2-3)

『その矢は彼女の慈の威力により、来た道に向かって戻り行き、王の心臓に刺さらんばかりであった』

ここでは、上の mettāyā pharati 及び mettā-pharaṇa に替わって mettānubhāva の合成語が現れる。Sāmāvatī の物語は Udānaṭṭhakathā p. 382 22-23 にも語られるが、そこで彼女は mettā-vihāra-bahulā-ariya-sāvikā と型取られており、又その梵語版 Divyāvadāna の Mākandikāvadāna では彼女は侍女達に『汝等悉く慈を修定 (samāpad-) せよ』と命じ、侍女達は総て『慈を修定した』(sarvā yūyaṃ maitrīṃ samāpadyadhvam iti/tā sarvā maitrī-samāpannāḥ) と伝えられている。その結果、王は弓を満月の如く引き絞ったが、矢は途中で落ち、第二の矢は戻って王の足元に落ちた³⁰⁾。

(4-2) Nandiya-miga-jātaka にあって、親に孝に君に忠に、徳 (guṇa) 高き鹿は、己に矢を向けた王に対しても慈を先として泰然自若、王はこの鹿に矢を射る事が出来なかった。

Mahāsatto... apalāyitvā nibbhayo hutvā mettaṃ purecārikaṃ katvā...
niccalo aṭṭhāsi. Rājā tassa mettānubhāvena saraṃ vissajjetuṃ

nāsakkhi (Nandiyamiga-jātaka 385, J.3.273.12-15)

『彼は逃げもせず、恐れもせず、慈を先となして、不動のままであった。王は彼の慈の威力により、矢を放つことが出来なかった』³¹⁾

この文章にあって王は『心なき木片 (acitta kaliṅgara-kaṇḍa) すら汝の徳を知る、況んや心ある人間 (sacittaka manussa-bhūta) たる己に於いてをや』(19-20) と言って弓を捨て、狩獵を断念したと伝えられるから、ここで人間のみならず『心』なき弓も鹿の慈に感応した事が知られる。同類の表現は弓のみならず『心なき (niccitta, nijjiva) 矢』もその徳を知るとして、Dhammapadaṭṭhakathā I p.217 lines 2-8 に繰り返される (ayaṃ hi nāma niccitto nijjivo saro pi etissā guṇaṃ jāni, ahaṃ manussabhūto pi na jānāmi)。

(4-3-1) 毒と火と矢は次下の章句にあって並立されているが、そこでは放たれた矢は慈心を修する者の前に花と化した。

maitrāvatas tasya muneḥ śarire viṣaṃ na śastraṃ kramate na cāgniḥ
kṣiptāni śastrāni vrajanti puṣpatām *maitrī hi lokottarabhāvi tasya*
(LV 21, p.310 lines 4-5)

『慈愛に住せるこの賢人の身体には毒も武器も火も襲う事なし。放たれし矢は変じて花となる。実に彼の慈愛は超世間的なりき』

(4-3-2) 中央アジア出土の Yoga 教書にも同様な記述が見える。

tadupari sarva-satv(āḥ sarvaprahara[ṇā]ni kṣipanti tāni puṣpa-
bhūtāni tatra n(i)patanti (YL p.125 2-3)

『彼 (yogin) の上に一切衆生は総ての飛び道具を放ったが、それらは花と化して彼の上に落ちた』

(4-4) 矢のみならず、槍も慈心の跳ね返す所であった。Visuddhimagga は母牛が能く獵師の槍を跳ね返して子牛を守ったと伝えている。

ekā kira dhenu vacchakassa khīra-dhāraṃ muñcamānā aṭṭhāsi. eko
luddako: taṃ vijjhissāmi ti hetthena samparivattetvā dīgha-daṇḍa-
sattim munci. sā tassā sarīraṃ āhacca tāla-panṇaṃ viya pavaṭṭamānā
gatā....kevalaṃ vacchake balava-piya-cittatāya; evaṃ mahānubhāvā
mettā ti (VM. p.313.26-31)

『或る雌牛が子牛に乳を飲ませていた。獵師が雌牛を刺そうとして、手を振り回して長い柄をもつ槍を放った。槍はその身体に当たると Tāla の葉の如くになった。それは唯、子牛への強い愛の心 (piya-citta) の致す所であった。

慈 (mettā) とはこの様に大きな威力 (anubhāva) をもつものである』

(4-5) しかしながら、慈心能く矢を払う物語の中で最も有名なものは Mahāvamsa に伝えられる Sihabāhu の物語である。物語の主人公 Sihabāhu はもと、その妹 Sihasāvali と共に Vaṅga 国の王女 Susimā が獅子との間に儲けた子であった。彼は久しく父親の獅子の洞窟に住んでいが、齡16歳に達した時己が出生の秘密を知って、父の留守中ひそかに謀って母と妹と共に洞窟を後にして逃げ出し、巡り巡って Vaṅga 国の都に入った。一方、妻と二人の子供に去られた父親の獅子は、彼等を探し求めてこの Vaṅga 国に来たり、都を荒らすに及んで国民は助けを求めて王に奏上した。国の荒廃を憂えた王は懸賞金を提供して獅子の殺害者を募る。ここに息子 Sihabāhu は母の再度の制止にもかかわらず懸賞に応募し、父親である獅子の殺害を決意した。洞窟にやって来た息子を見て、父親の獅子は愛情の余り彼に近寄るが、息子は案に相違して父に向かって矢を放った。しかし、矢はその額に当たっても、その慈愛心の故に再び息子の足元に戻り、地に落ちる事三度に及んだ。しかし遂に父親の獅子が慈愛心を失って怒りを発するに及んで、矢はその体を貫通したという。その該当部分の原文と試訳を提示すれば以下の如くである。

so taṃ gantvā guhā-dvāraṃ sihaṃ disvā va ārakā
 entaṃ putta-sinehena vijjhituṃ taṃ saraṃ khipi
 saro nalāṭam āhacca metta-cittena tassa tu
 kumāra-pāda-mūle va nivatto pati bhūmiyaṃ
 tathāsi yāva-tatiyaṃ, tato kujjhi migādhipo
 tato khitto saro tassa kāyaṃ nibbijjha nikkhami

(Mahāvamsa 6.28-30)

『彼（の息子 Sihabāhu）は洞窟の入口に到り、遠方より（父親なる）獅子を見た。息子への愛情に惹かれて近づく彼（父親）を殺さんと、彼（の息子）は矢を放った。しかし彼の慈心 (metta-citta) の致す所、矢はその額に当たっ

ても、息子の足元に戻って（虚しく）地に落ちた。かかる事三度に及んだが、百獣の王は遂に怒りを発した。すると放たれた矢は彼の身体を貫通した』この物語に見える『慈心』（*metta-citta*）の概念はつとに J.Filliozat の注目した所で、彼は『慈心』に一種の自己防衛力、魔力（*une puissance protectrice, une force magique*）の宿る事を指摘した³²⁾。『慈心』ある限りそれは彼を防衛するが、『慈心』喪失を機にその防衛力は消失する。この王の物語は又 *Dīpavaṃsa* 9.2-4.³³⁾ 大唐西域記 11.1.2³⁴⁾に見える³⁵⁾。(4-6)『慈心』は飛び道具、火、毒を払うのみならず、危険な猛獣をも調伏する。既述の中央アジア出土の Yoga 教書は次のように言う。

punar api [ca] sarvasatvāḥ sarvapraharaṇāgniviśādīmś cādāya
 śimhavyāghrādayaś ca tam abhidravyaṃte tasya maitrāśa(yasya)....
 mayābhrakūṭavaṃ nirgatya sarvaṃ gaga[na]m āpūrya prakāravat
 sarvasatvān upaguhya tiṣṭhati/te ca satvā muktasamrambhapra-
 haraṇās tam eva praṇamantiti (YL p.125-6)

『更に一切有情は総ての飛び道具、火、毒その他を持って、又獅子、虎その他は彼に襲いかかった。慈心に住する彼（Yogin）の（頭より）雲の峰の如き（乳）より成る（川）が流れ出し、一切空中を満たし、垣壁（*prākāra*: で囲う）が如く一切有情を覆った。すると彼等有情は怒りと飛び道具を捨てて、彼に礼拝した』

(4-7) 同様に『慈心』をもって危険な動物を調伏する物語の例として最後に有名な『醉象調伏』の章句を挙げる。

atha kho bhagavā nālāgiriṃ hatthiṃ mettena cittena phari.
 atha kho nālāgiri hatthi bhagavato mettena cittena phuṭṭho soṇḍaṃ
 oropetvā yena bhagavā ten 'upasaṃkhami. upasaṃkhamitvā bhaga-
 vato purato aṭṭhāsi (Vin. 2.195.22-25)

『するとその時、彼は Nālāgiri 象を慈心を以て遍満した。Nālāgiri 象は彼の慈心に遍満されると鼻を曲げて、彼の近くに來たりその前に立った』³⁶⁾

ここに『慈心を以て象を遍満する』という『遍満』の動詞 *phar-* は『普照』とも漢訳されるが、この語は付論において言及する所となるであろう。(4-8) 上の *Sihabāhu* の物語に見られる様に、慈心はそれを涵養、修習す

る間に於いてのみ有効に作用した。この事実を端的に示すものとして既述の慈の11功德に言及する Milindapañha の一節が参照されるべきである。Milinda 王は童子 Sāma の物語を引き合いに出して、彼が何故に Piliyakkha 王の毒矢に射られて倒れたか訊ねる。これに対して Nāgasena はもともとこれら(11の)功德(guṇa)は(各)人に(生まれつき)具わるものではなく、慈心の修習によってのみ発効するものであるとして次のように言う。

n'ete mahārāja guṇā puggalassa, mettā-bhāvanāy'ete guṇā. Sāmo mahārāja kumāro ghaṭaṃ ukkhipanto tasmim̃ khaṇe mettā-bhāvanāya pamatto ahosi. Yasimim̃ mahārāja khaṇe puggalo mettam̃ samāpanno hoti, na tassa puggalassa tasmim̃ khaṇe aggi vā visam̃ vā sattham̃ vā kamati (MP p.199 2-6)

『大王よ、これらの属性は人に依らず、慈の修習に依る。Sāma は、彼が瓶を持ち上げ(て川に降り立っ)た時、その瞬間慈の修習に注意を怠った。人が慈に集中する瞬間は、火、毒、武器が彼に襲う事はない』

慈心力は集中(samāpanna)の結果現れるもので、人がそれに集中しない(pamatta, pramatta 放逸)間は無効のまま彼を守護する事がない。況んや慈心を失って怒りを発した Sihabāhu の父親の場合には当然それが無効となる道理である。

V

大智度論の五種功德の第五『善神擁護』に相当するものとして³⁷⁾、国王の慈行能く人喰いの薬叉の領内入国、加害を排すとなす主題がある。慈定に住する王の下、領内の者は庶民に至るまで曾って恐怖というものを知らなかった。王の慈(maitri)の実践が強力な守護力(Schutzzauber)となっていた故である³⁸⁾。その中でも最も有名なものは一般に『慈力王本生』³⁹⁾と呼ばれるものの前半部分に語られるが、Saṅghabhedavastu(根本説一切有部毘奈耶破僧事卷第十一)は相い前後して同工異曲の二つの物語を載せているので、以下に Vajrabāhu 王の物語と Maitrabala 王の物語を紹

介する。尚、これら一群の『血の布施物語』の比較対照は岡田真美子博士によってなされている⁴⁰⁾。

(5—1) 金剛臂王の物語 (Gnoli II pp.18—19=大正24 155c22-156b2)

昔、ベナレスに都したこの王は名君の誉れ高く、国土安泰、五穀豊穰、人民は皆幸せであった。彼は極度に慈を修し (tenātyantam maitrī svabhya-stā)、日に三度『慈定』に入るを常としていた (trir divasasya maitrīm samāpadyate: 彼王極修慈悲。昼夜六時入慈悲定。大正 155c)。但し、王入定の間は乞食者 (yācanaka-jana) は施物を受ける事が出来なかったので、王は大臣達に命じて都の四門に施堂 (dāna-śālā) を建立して、そこに飲食衣服から金銀財宝に至るまで用意し、沙門、婆羅門等の要求に応えさせていた。時に、人間の精気を奪う (ojo-hāra) 五人の薬叉は、Adakavattā 城主 Vaiśravaṇa 王 (多門薬叉) の不興を買って都より追放され、諸所を遍歴する間にベナレスに到った。彼等はそこで牛飼い、羊飼い (牧牛羊 paśu-pālaka)、牧草運搬人、樵夫 (kāṣṭhahāraka)、その他の人々 (pathājiva, utpathājiva??) に会って彼らに『汝等は我等夜叉を恐れぬか』 (na yūyam asmān bibhīta) と問う。すると彼等は答えて『我等の王は慈を旨とし、悲に満ち、一切有情の為を思い、日に三度慈を修すれば、何故に我等は怖れを懐く事あるや』 (bhavantaḥ kim-artham bibhīmaḥ, yeṣāṃ asmākam rājā maitry-ātmakaḥ kāruṇikaḥ sarvasattva-hitādhyāśayena trir divasasya maitrīm samāpadyate?: 我王性大慈悲。於諸有情利樂意樂。昼夜六時入慈悲定: 大正24 156a10-11) と言った。そこで彼等五人の薬叉はバラモンの姿に身をやつして都の四門の施堂を見学した後、王が慈定より出定した時を見計らって (rājānaṃ maitryā vyutthitam jñātvā) 王に謁見し、飢渴を訴え飲食の布施を乞うた。王は家臣に命じて飲食を用意させたが、彼等薬叉達が『飲血食肉』以外は何物も欲しない (māṃsa-rudhira-bhakṣā vayam) と言うに及んで、衆生を害するを欲しなかった王は自害を決意した。それを見て取った五薬叉は更に『熱血熱肉』を要求したので、王は医師達を呼んで自分の血管を切断 (śirā-vedha) して彼等に飲ますよう命じた。医師達がそれを拒否するに及んで王は自らその身体の五箇所を刺して彼等五薬叉を満足せしめた

と伝えられる。

この金剛臂王の物語に在って、王が身を刺して血を五人の薬叉に施す物語に先立ち、王の慈力の効が語られる。即ち王にして慈定を修し、慈心に満ちていれば、人民は皆『吸人精気』の薬叉すら恐れないうのである。(5-2-1) Maitrabala 王の物語 (Gnoli II, pp.20-21=大正24 pp. 156b13-c26)⁴¹⁾

同工異曲の物語が、上の『金剛臂王』の直後に『慈力王』の物語として伝えられている（根本説一切有部毘奈耶破僧事11卷）。但し『熱肉熱血』を乞う五人の薬叉物語に先立つ部分は上の『金剛臂王』のそれといささか趣を異にしているので、以下に該当部分を訳出する。

例の五人の薬叉は Adakavattā (阿洛迦伐底) 城より出て Benares に到ったが、都の住民は誰一人として彼等を供養 (bali-mālyopahāra) しなかった。これに怒った彼等五薬叉が都に疫病 (iti) を蔓延せしめたから多くの住民が死んだ。大臣達がこの件を王に奏上すると、王は『朕は日夜、一切有情に益あらんと念じているから、臣民達も一切有情への慈しみを心に念じよ、さすれば災厄も治まるべし』 (aham̐ sarva-sattva-hitādh yāśaya-tatpareṇa manasā rātrindivam atinamayāmi; tad yuṣmābhir api sarva-sattvānugatā maitrī manasi kartavyā; evaṃ vaḥ śāntir bhaviṣyati: 我於有情為欲利益。專心勤求日夜不斷。汝等諸人。於諸有情起大慈心。常修此心諸災寂靜 大正24 156b22-24)との勅語を賜った。人民は皆勅語を貫しとなして一切有情に大慈心を起こしたので、彼等五薬叉はその国に入る事 (不能得入: praveśa) も、又それを害する事も出来なかった (不能為害)。彼等は城外で牛飼い達 (gopālaka, pl.) に会い、何故に彼等が薬叉を怖れぬか訊ねる (bhavanto na yūyam asmad bibhit a?)。牛飼い達は『慈力王の思惟する所を、我等も亦思惟なす (vayaṃ hi yad rājā maitrabalaś cintayati tac cintayāmaḥ: 我慈力王每常思惟我亦思惟 156C 1-2) 故に怖れを知らぬ (na bibhimah)』と答えた。薬叉達はその思惟の内容を問うた時、彼等は sarva-sattvānugatā maitrī (一切生類への慈) と答えた。そして薬叉達は、この故にこそ我等はこの都に入れぬのだと納得したと伝えられる (idam atra kāraṇam̐ yena

vayam idānim avatāraṃ na labhāmaha iti: 彼薬叉等聞是語已便作是念。我等今者。以此諸人修慈悲故。於此城中不能損害156C 4 - 6)。

(5-2-2) 同じ物語が Maitri-bala 王のそれとなって Āryaśūra の Jātaka-mālā 第八章 (Maitribala-jātaka) に語られる。この王は漢訳仏典において『慈力王』と訳され、彼の所行はその疑似漢訳『菩薩本生鬘論』(慈力王刺身血施五夜叉縁起第八) (大正3 339c-340a) に見えるが、それがもと賢愚経卷二第十三『慈力王血施品』に由来している事は J.Brough の指摘した通りである⁴²⁾。但し、Āryaśūra の伝える所は既述の物語といささか趣を異にしているから、以下にその概略を紹介する。

既述の物語に於ける様に、ここではこの名君の慈行の内容は詳らかには述べられていないが、彼の治世の下、人の精気を吸う (ojo-hāra 吸人精気) を事とする五人の薬叉 (yakṣa) は力の限りを尽くしても、その人民を害する事が出来なかった。

te pareṇāpi yatnena saṃpravṛttāḥ svakarmani
naiva tad-viṣaya-sthānāṃ hartum ojaḥ prasehire (4)
tasya prabhāvātīśayān nṛpasya mameti yatraiva babhūva buddhiḥ
saivāsya rakṣā paramāsa tasmād ojaṃsi hartum na viṣehire te
(JM 8.5)

『彼等は力の限り己が務めに精出したが、その領内の住民達の精力を奪う事が出来なかった』

『その王の(慈の)力の強大なるが故に、何人でも「私も(それに)与かる」という意識そのものがその人にとって最上の護符となっていた。さればこそ彼等(薬叉達)は(その)精力を奪う事が出来なかったのである』

この国の一般庶民が、性凶悪な薬叉の力に対抗し得るような明呪 (vidyā)、苦行 (tapas)、神通力 (siddhi) の類を持ちあわせているとも思われぬのに、彼等の前に無力になってしまうのは何故かと五人の薬叉は互いに顔を見合わせて訝る。彼等はバラモンの装いをして逍遙する間に、一牛飼 (gopālaka) の荒野の木蔭に独り座して縄をなうに出会う。薬叉達は彼の側を徘徊しつつ、彼が何故に性凶暴なる (nisarga-raudra) 者の前に怖れないのかと訊ねる。

janaḥ svastyayanenāyaṃ mahatā paripālyate

devendreṇāpy aśakyo 'yaṃ kiṃ punaḥ piśitāsanaiḥ (JM. 8.9)

『拙者は大護符 (svastyayana) によって守護されており。帝釈天すら（その前に）無力とあれば、況んや肉食者（たる薬叉、羅刹共）に於いてをや』
薬叉達は好奇心の余り、汝の svastyayana-viśeṣa とはどのようなものかと彼に問うと、牛飼いは彼等人民の頂く王の胸、腕、顔、眼力を讃え、その風貌を謳って次の如く言う。

kanaka-giri-śilā-viśāla-vakṣāḥ

śarad-amalendu-manojña-vaktra-śobhaḥ

kanaka-parigha-pīna-lamba-bāhur

vṛṣabha-nibhekṣaṇa-vikramo narendraḥ (JM. 8.11)

『その胸は黄金山の岩の如く広く、顔は秋の無垢の月の美しき輝きを呈し、腕は黄金の門の如く太く長く、眼光は雄牛の如し』

薬叉達は更に彼等がその領土の住人の誰一人として害し得ないのは何によるか訊ねる (kiṃ-kṛto 'yam asya rājñaḥ prabhāvo yad asyāmānuṣā na prasahante viṣaya-vāsināṃ janāṃ hiṃsitum p.43, lines 8-9)。これに対して牛飼いは次の様に答える。

maitrī tasya balaṃ dhvajāgra-śabalāṃ tv ācāra-mātraṃ balaṃ

nāsau vetti ruṣaṃ na cāha paruṣaṃ samyak ca gāṃ rakṣati

(JM.8.14ab)

『彼の力は慈、彼の幟の頂き⁴³⁾ 具える軍隊は唯慣行によるのみ。彼は怒りを知らず、悪口雑言をなさず、正しく大地を守護するのみ』

我等の王はこのような幾百の徳 (guṇa) を具えているので、災難 (upadrava) がその領地の住民を襲う (hiṃs-) 事が出来ないのだという。

既述の物語には見えなかった人民の持つ svastyayana⁴⁴⁾ (護符: talisman [Koroche]) がここに見えるが、漢訳はこの部分を伝えていない⁴⁵⁾。しかしここに国王の慈行が人民を守護 (rakṣā) する所以となって、災厄も国を襲わず、人喰いの薬叉も無力となり、その結果領内の人民は曾って恐怖 (bhaya) というものを知らなかったと語られている。

この部分の韻文的変曲が Mahaj-jātaka-mālā 46 (Maitribala) に現れ、

それと Āryaśūra との比較が M.Hahn⁴⁶⁾ によってなされている事は岡田博士の指摘する通りである。

VI

大智度論は五種功德の一に更に『入火不焼』を挙げているが、以下に一例のみ挙げる。この『入火不焼』は Rāmāyaṇa に見える Sitā の神明裁判を想起せしめるが、仏伝より例を挙げればそれは仏の降魔成道物語に見える。彼が慈愛に住す (maitrī-vihāra) れば、真っ赤に燃える炭火の雨も火傷を生ぜしめる事がなかったと伝えられる。

tad bodhi-mūle pravikīryamāṇam aṅgāra-varṣaṃ tu savisphulingaṃ
maitrī-vihārād ṛṣi-sattamasya babhūva raktotpala-patra-varṣaḥ
(Buddhacarita 13.42)

『菩提樹下に散布されたる火花散る炭火の雨は、聖仙が慈愛に住すれば、赤蓮花卉の雨と化せり』

『火』ではないが、それに類する『熱油』をかけられてもそれが冷水の如くになって火傷を負わなかった故事は、富豪 Puṇṇaka の娘、女性在家信者 Uttarā の物語に見られる。

Uttarā upāsikā Puṇṇaka-seṭṭhissa dhitā. Tassa Sirimā nāma gaṇikā
issāpakatā tatta-tela-kaṭāhaṃ sise āsiñci. Uttarā taṃ khaṇaṃ yeva
mettaṃ samāpajji. Telaṃ pokkharapattato udabindu viya vivaṭṭa-
mānaṃ agamāsi. Ayam assā samādhi-vipphārā iddhi (VM. p.381
12-16)

『富豪 Puṇṇaka の娘、Uttarā 優婆夷に、遊女 Sirimā は嫉妬の余り、彼女の頭に熱油を注いだ。その瞬間 Uttarā は慈を修した。すると油は蓮の葉から落ちる水滴のようになった。これは彼女の三昧より遍満した神通力 (の致す所) である』

ここに『慈力』は寧ろ『慈三昧』とされ、『集中力』が奇跡を生むことになっている。

同じ Uttarā の物語は Dhammapadatthakathā vol.3, p.310 7-18 (cf.

p.313 35) に述べられるが、当該部分は tam mettāya phari となり、熱油は sitūdakam viya ahosi となったと言われ、又 Manorathapūraṇī においては tam khaṇam yeva mettajjhānam samāpajjitvā aṭṭhāsi.... Mettajjhānassa vipphāreṇa Uttarāya matthake āsittam pakkatṭhita-telaṃ paduma-patte āsitta-udakam viya vinivaṭṭitvā gatam (Vol.1, part 1 p.451.22-452.1) となっている。これらによって知られる様に、慈禪定 (metta-jjhāna)、慈三昧の合成語が mettāya pharati (慈遍満) の概念に対応している⁴⁷⁾。

VII

古来インドには奇跡を可能ならしめる『超自然力』に、祭式、呪文、tapas、satya-kriyā (satya-vacana)、女性の貞操の力等が数えられていた。『四無量心』就中『慈』の概念をこのような『超自然力』『魔力』の視点から捉えるのは伝統的仏教学の立場からすれば邪道、冒瀆の類かとも怖れるが、上來說き来たった所は L.Schmithausen の近著 Maitrī and Magic に導かれて、この種の『神秘力』の視点から『慈心』『慈三昧』の一面を捉えようとしたものに外ならない。但し同じく『慈悲』といっても、『悲』を強調する大乘仏教と『慈』より出発した上座部仏教とは立場を異にするし、又それらを安易に西洋の『愛』の概念と比較すべきでない事はつとに S.Schayer の指摘した所である⁴⁸⁾。尚多くの問題を残していると思われるが、可能ならば大方の示教を得て、更に別に蒐集した資料をも検討して行きたいを考える。

〔付論〕 phar-a-ti

通常 pervade, permeate, suffuse (PTSD), durchdringen (YL 253), erfüllen, ausbreiten (Mylius), diffuser (Filliozat 125) と訳される Pali 語の動詞 *phar-(a-ti, Skt. sphar-, Werba 329 [372] sphr-)* は幾つかの問題を含む。就中その過去分詞形 (*phuṭa, sphuṭa* : Trenckner 321 *apphuṭa*, Edgerton 613, Turner 800, cf. also Oldenberg 1174 [pharati und phusati], Mayrhofer 543, Goto 334-5) には複数の動詞からの混合用例があって一概に論じ得ぬ所がある。今は詳論する余裕がないので、以下に Pali 及び BHS 文献からこの過去分詞の幾つかの用例を提示して、この語の意味合いの一端を窺うよすがとする。

先ずこの過去分詞が『慈』(maitrī) の語の具格と連合している用例を見る。

- (1) 有名な優留毘羅迦葉 (Uruvela-kassapa, Uruvilvā-kāśyapa) の物語にあって、火三昧 (火定) に入った (tejo-dhātuṃ samāpanna) 仏が毒蛇を調伏する場面に次の様に述べられる。

bhagavatā ca maitryā sphuṭo damito ca nirviṣo saṃvṛtto na ca bhūyo krodham vyāvahati (Mhv. 3.429.3-4)

『世尊は慈により (毒蛇を) 遍満し、調伏し、無毒たらしめ給えば、彼は二度と怒りを懐く事なかりき』⁴⁹⁾

- (2) 同様に那羅聚楽 (nāḍakanthā) における疫病退治の故事を物語る Avadāna-śataka 14 (iti) に次の文言が見える。

tato bhagavatā tan nagaraṃ sarvaṃ hṛdi-maitryā sphuṭaṃ yato marakāḥ prakrāntāḥ itiś ca vyupaśāntā (AS 1.79.14-15)

『その時世尊はその街全体を心慈もて遍満し給えば、多くの人々を死なせた疫病も退散、鎮静せり』⁵⁰⁾

しからば、同類の具格を伴う過去分詞構文にはどのようなものがあるであろうか。

- (3) 先ず、邦語の『会場立錫の余地なし』となす表現にもこの語が用いられる。

Pali 涅槃經の仏入滅の場面は次の様に描かれている。

sāla-vanaṃ sāmantaṭo dvādasa yojanāni n'atthi so padeso vālagga-koṭi-nittuddana-matto pi mahesakkhāhi devatāhi *apphuṭo*

(Dighanikāya 2.139.17-20)

『沙羅樹林の周囲12 yojana にわたり、偉大な神々によって遍満されぬ場所としては、兎の毛の先端で突く程もなかった』

Trenckner に従って a-pphuṭa は Pali pharati, Skt sphar- の過去分詞と取る。⁵¹⁾

(4) Guptika 物語に言われる。

jāta-mātrasya sarva-śarīraṃ piṭakaiḥ sphuṭṭam saṃvṛttam (AS 2.167.1)

『彼は生まれるや否や、全身膿包で覆われていた』(=おできだらけ)

(5) 不浄観を窺わせる美女の死体の様を描いて、

bhikkhu sīvathikaṃ gantvā addasaṃ itthim ujhitam

apaviddham susānasamim khajjantim kimihī phuṭam

(Theragāthā 315 Cf.393)

『比丘なる余は屍の捨場に到り、火葬場に婦人が捨てられ、蛆虫に遍満され(= 蛆虫だらけで、彼等によってその肢体) 破られ、食われつつあるのを見た』

上の三つの例においては複数具格 (devatāhi, piṭakaiḥ, kimihī) が (s-)phuṭa と連合しているが、その一は『立錫の余地なき混雑』を指示し、後二例は邦語の『... だらけ』に相当している。その『遍満』の様はそれらによって充満していて、他の何者もそこに介入し得ない様を描き出している。

単数具格の連合例は邦語の『一世を風靡す』となす表現にも見られる。

(6) 才色兼備の才媛を記述して次の様に言われる。

tato 'syā yaśasā sarvā śrāvastī sphuṭā saṃvṛttā tīrthyāś cāsyā ahany

ahani darśanāyopasaṃkrāṃanti tayā ca saha viniścayaṃ kurvanti

(AS 2.20.6-8)

『彼女の名声は全 Śrāvastī に拡がった。外道達は毎日彼女に会いに来ては、疑問を解決していった』

この『名声一世を風靡す』に準じる文脈にも『他者介入』の排除が暗示されている。

上例のように具格に立つ名詞が具体的なものの代わりに、『抽象名詞』（pīti-sukha）である場合はどうであろうか。そこにも『充滿』『一杯』の意味合いが看取される。

(7) 上の sarīra に替わって、それが kāya と連合して用いられる場合がある。

So imam eva kāyaṃ vivekajena pīti-sukhena abhisandeti parisandeti paripūreti *parippharati*, nāssa kiñci sabbāvato kāyassa vivekajena pīti-sukhena *apphutam* hoti (Dīghanikāya 1.173.2-5)

『それはこの身体を分別より生じた喜悦により満たし、遍満し、その全身体の何処も喜悦に遍満されぬ所はなかった』

この文章は邦語の『全身これ喜悦』の義に相当し、上の sarīra（おできだらけ）と異なって身体の内面が寧ろ強調されているが、ここでも『他者介入』の余地はない。

(8) 心が他者によって遍満される時、それは『憑かれる』の義に用いられる場合もある。有名な仏が死期を悟って阿難にそれとなく三度暗示した一節に次の様に言われる。

sphuṭo 'bhavad Ānando bhikṣur Māreṇa pāpīyasā..... (DivA 201 21)

『比丘阿難は（その時）悪魔 Māra に取り憑かれていたので....』⁵²⁾

悪霊に憑かれている場合には『心ここに在らず』の状態にあり、ここにも『他者介入』は排除される。

(9) 漢訳はしばしばこの語の訳に『普照』の語をあてるが、『光輝』（ava-bhāsa）の具格との結合も見られる。

sarvaś cāyaṃ trisāhasra-mahāsāhasra-lokadhātur mahatāvabhāsenā sphuṭo'bhūt (LV 300 10-11).⁵³⁾

『これなる一切の三千大千世界は大なる光輝に遍満された』

ābhā との結合も見られる。

sarvāṇi ca tāni buddha-kṣetrāṇi bodhisattvasyābhayā sphuṭāni sarī-

drśyante sma (LV.277 10-11)

『これら一切の仏国土は菩薩の光輝により遍満されたかに見えた』

神武東征時の『金の鷄』を連想させるこれらの文章にあつて、光が他者を眩惑するかに見える。ここに『他者介入』は排除されるのみならず、他者による抵抗は無効となる。

(10) 『光輝』のみならず、『香り』も又同類の文脈に現れる。

vaidūrya-mayam aneka-divya-ratna-pratyuptam tathāgata-vigraham
divyātikrāntena gandhena sphuṭam (Suv.7.6)

『瑠璃より成り、各種天上の宝石に埋められた如来の形をなすこの家は、天上のそれを超える様な香によって充たされた』（帝青瑠璃種種衆宝。雑彩間飾如仏浄土有妙香氣。過諸天香充滿：大正16 404c10-12）

これら諸文脈（3-10）は通常『遍満』と訳出される phar- の過去分詞が maitrī 以外の名詞具格と連合している例を提示しているが、それら文脈の性格を以下に検討する。

邦語の『立錐の余地なし』『体中おできだらけ』『屍は蛆虫だらけ』『一世を風靡す』等に相当するこれら具体的文脈は、混雑充満してそこに他の何者も入り込む余地なく、又眩惑の結果（光輝普照）それに抵抗する術なき様を指示している。これら具体的物理的な『遍満』とは別に今一つ、内面的心理的な『魔に取り憑かれ』『体中歓び一杯』の文脈においても、そこには他の何者をも介入させない『力』の意味合いが籠められている。

その様な視点から当該の『慈心による遍満』を再度考察する時、そこには同様の他者による一切の介入を排除し、彼等をして無抵抗ならしめる一種の『力』が含意されているのを我々は見る。文脈には時に完全征服を保証する戦闘的な語感が漲り、又実際 maitrī の名詞の具格は領土拡大の概念や『勝利』の動詞とも連合している (sarvaṃ ca buddha-viṣayaṃ labhase 'dya śūra maitrā vijitya vipulāṃ saṭha-māra-pakṣāṃ: LV 343.5-6)。

この様に考えてくると通常『慈心によって毒蛇、酔象、怨敵を遍満す (ahi-kulāni mettana cittena phari, hatthiṃ mettana cittena phari, etc.)』

と訳される文言の意味する所は次の如き構造を有するものと思われる。

行者が危険な動物や怨敵に遭遇した際、自らの内に『慈心』(metta citta)を発動してそれを修習 (bhāvaya-, bhāvanā) し、更に集中力によって強化 (samāpanna) すると、慈は J.Gonda の言う Daseinsmacht, power-substance 乃至 material outflow (Schmithausen [1] p.42)⁵⁴⁾ となって、彼とこれら凶暴な動物や怨敵との間に一種の相互不可侵の非日常的空間 (a force-field of 'protection.' Wiltshire p.242) を形成する。それは一種の『磁場』の如きもので、行者の側に安全を保証するのみならず、この空間の中に在るもの総てをその感化の下に置き (tele-volition, Rhys Davids[2] p.225)、かくて毒蛇は毒を抜かれ、又酔象は酔いから醒めてその凶暴性を放棄し、怨敵は悪意を解除する。その空間は『友情』(maitri) に満たされており、それを維持する限り相互の安全が保証されるが、不注意 (pramatta) や裏切りによって信頼関係に破綻を来すと、両者は再び『危険な関係』に戻る。しかし怒りを収めて更に『慈心』を強化する時、それは猛獣怨敵をも友となし、更にそれを無限 (apramāṇa) に拡大することも可能となる。この『非日常の聖空間』は又火気 (agni)、武器 (śastra) の類を寄せ付けない。この修習乃至集中力によって創り出された『聖空間』に住する事が『梵住』(brahma-vihāra) の意味する所に他ならない。その『空間』は『最高の (brahma)』境地の如く型取られ、『明るく見通しよく、危険なき安全地帯 (loka) (Gonda 1966 pp.108-110)』として梵界 (brahma-loka) に匹敵していた。

この『慈心の修習』による聖空間の形成は更に二つの問題を提起している。

第一に、それは一面において近世インドの Mahatma Gandhi の『非暴力』(Non-violence: ahimsā) の精神に通ずるものがある。他人の暴力に対してひたすら『非暴力』に徹して抵抗する姿勢には、有害危険な動物に対して慈心を以て遍満するに似たものがある。ここに、想定される加害者と被害者の間には、『非暴力』『慈心』によって一種の『特殊聖空間』が

造り出され、その中に在って後者は前者を感化する。二つの場合に共通して、そこには常に弱き者の側に真剣にして且つ極めて密度の高い『挺身性』が前提されている。

第二に、慈心の修習が火や毒を払うとなす思想は、古代インドの神明裁判 (divya: Lariviere 1981) を想起せしめる。周知の通り人的手段 (mānuṣa-pramāṇa) によって罪状が立証され得ぬ場合に、彼等は身の潔白を証かすに神明裁判 (daivika-pramāṇa) に頼った。それは一般に秤、火 (熱油を含む: ibid. pp.27 and 45)、水、毒 (ibid. p.53) 等によって試されるが、潔白な者に対しては火も毒もその主宰神 Agni, Śiva (ibid. pp. 13-4) の介入する所、本来の『焼却』『毒殺』の機能を放棄して彼を害することがなかった。この際無実の者を守ったものは『真実』 (satya: ibid. p.3) とされるが、それは慈力による守護の概念に一脈通じる所があるであろう。

人間同士の友情や動物との友愛関係を、このような『慈心』による『自己防衛』『相互安全保障』という合理的構造の下に理解する事に我々はいささか抵抗なしとしないが、元来人間が自然の脅威や危険な動物に対処するには、この種の姿勢 (vihāra=state of mind) が不可欠であったと思われる。それは又常に超自然力、魔力を結果する『禅定』 (jhāna, dhyāna) 『三昧』 (samādhi) 等の『精神的集中力』と連動していた。

註

- 1) この語の漢訳仏典用例を検索する必要があるが、今は詳述する違がない。唯、一例のみ挙げるに留める。『以慈心力徐捨離此三事』（大正25 209a23）
- 2) Schmithausen [1] p.35 (cf.p.32 note 66, pp.49-51) and [2] p.187.
- 3) この種の章句の蒐集は他の機会に譲るが、例えば苦行者の集う庵では、不具戴天の敵同士も互いに親しむと言われる。

krīḍanti sarpair nakulā mṛgair vyāghrāś ca mitravat

prabhāvād dipta-tapasah saṁnikarṣa-guṇānvitāḥ (MBh.13.14.42)

『Nakulaも蛇と戯れ、鹿も虎も友の如く親しむ。輝く苦行力の致す所、近づけばその感化を受く』

tasya saṁdrśya sadbhāvam upaviṣṭasya dhīmataḥ

sarva-sattvāḥ samīpasthā bhavanti vana-cāriṇaḥ (5)

simha-vyāghrāḥ saśarabhā mattās caiva mahāgajāḥ

dvīpinaḥ khaṅgabhallūkā ye cānye bhīma-darśanāḥ (6)

te sukha-prāśnādāḥ: sarve bhavanti kṣatajāśanāḥ

tasyarṣeḥ śiṣyavac caiva nyag-bhūtāḥ prika-kāriṇaḥ (MBh.12.117.7)

『この（人里離れた地に）座す聖仙の浄行を見て、森に彷徨う一切生類は、獅子、虎、酔象、シャラバ、豹その他恐ろしき形相なすものも皆彼に近づけり。血を飲む猛獣も悉く、かの聖仙に挨拶、会釈なし、弟子の如く奉仕なす』

nīpānvayaḥ pārthiva eṣa yajvā

guṇair yam āśritya paraspareṇa

siddhāśramam śāntam ivaitya sattvair

naisargiko 'py utsarje virodhaḥ (Raghuvamśa 6.46)

『この王はニーパの末裔、祭式を行い、彼の許に到れば、その徳の致す所、不具戴天の生類も、閑静な聖者の庵に到る如く、争う事なし』

iha vīta-bhayās taponubhāvāj jahati vyāla-mṛgāḥ pareṣu vṛttim

(Kirātārjunīya 13.4ab)

『これなる（庵）にては、（行者）の苦行の致す所、（生類互いに）恐れ無く、猛獣も他（の弱少動物）に（己が）命の糧となす事なし』

ここに見る様に彼等野獣を感化するものは śīla, tapas, guṇa の類である。

それらの徳を示す概念は仏典にあつて体系化され『慈』の内に纏められた。尚、哲学文献には以下の Yoga-sūtra の章句が参照さるべきである。

ahiṃsā-pratiṣṭhāyāṃ tat-saṃnidhau vaira-tyāgaḥ (Yoga-sūtra 2.35)
 śāśvatika-virodhā api aśvamahiṣa-mūṣikamārjāra-ahinakulādayo 'pi
 bhagavataḥ pratiṣṭhitāhiṃsasya saṃnidhānāt tac-cittānukāriṇo vai-
 raṃ parityajantīti (Tattvavaiśārādī)

śāśvatika-vidveṣiṇām api sarpa-nakulādīnām; tasya ahiṃsakasya
 saṃnidhau vaira-tyāgo bhavati (Vivaraṇa)

Cf. Malinar [2] pp.175-6.

- 4) Cf. Schmithausen [1] p.42 note 86. そこに言及されなかったものとして例
 えば、VM. p. 313 4ff.

その中でも Visākha-thera と樹木の精との会話に次の如く言われる (lines 9-
 12).

mayi idha vasante tumhākaṃ ko guṇā ti? Tumhesu, bhante, idha
 vasantesu amanussā aññam-aññam mettam paṭilabhanti, te dāni
 tumhesu gatesu kalaham karissanti, duṭṭhullam pi kathayissanti ti.

又、Mahāvastu にも仏成道時の記述中に、

ye ca tiriicchāna-yonīyaṃ māṃsa-rudhira-bhojanā
 maitrāya sphuṭā buddhena na hiṃsanti parasparam (Mhv 2.350.14-15)
 漢訳仏典にも類例が見出される。古来インドで不具戴天の敵とされる蛇とガル
 ダも、蛇の慈心、慈忍力によって天敵を調伏する事が可能であった。漢訳『菩
 薩本生鬘論』は慈力王物語に先立って『慈心龍王消伏怨害縁起第七』(大正 3
 338b-339c) を載せ、そこには龍が金翅鳥を『慈忍力』『大慈心』を以て調伏し
 た物語が語られる。(cf. Brough pp.226ff).

- 5) Cf. MBh.1.39.21 (mantrāgadair viṣa-harairakṣyamāṇaṃ prayatnataḥ),
 1.181.3 (vārayiṣyāmi saṃkrudhān mantrair āśīviṣān iva).

- 6) Cf. Oldenberg [1]

- 7) 古くインドの諺にいう。

akṛtopadravaḥ kaś cin mahān api na pūjyate
 pūjayanti narā nāgān na tārkṣyaṃ nāga-ghātinam (IS. 39)

『禍いをもたらさぬ者は、たとえ偉大なりとも、崇められず。

人々は蛇を崇めるも、蛇を殺すガルダを崇めず』

aprakṛta-śaktiḥ śakto 'pi janāt tiraskriyām labhate
nivasann antardāruṇi laṅghyo vahnir na tu jvalitaḥ (IS.460)

『力ありといえども、その力を発揮せぬ者は、凡人より軽んじられる。

薪の中に潜む火を人は跨ぐも、一旦燃え上がれば跨ぐ人なし』

- 8) 他の猛獣に比し毒蛇により命終なす者は年間20,000人の多きに達し (Schmithausen [1] p.9 note 1), Sarpa-bali, Sarpa-sattra の儀式や解毒の呪文の隆盛となった (Winternitz 14ff.). Cf. also Schmithausen [2] pp.196 and 199.
- 9) Schmithausen [1] p.31
- 10) Cf. Rhys Davids [2] pp.211ff., Saddhatissa pp.89-90.
- 11) Winternitz pp.21ff., Gonda pp.160ff.
- 12) Cf. Law pp.17ff., Malalasekera 2. p.782.
- 13) MBh.1.107.7-22.
- 14) Feer p.253.
- 15) Bulke pp.107-117.
- 16) 原 pp.529-530.
- 17) 次下に示す11の中、8-10を欠く。Cf. Lamotte p.1266 note 1.
- 18) Aṅguttara-nikāya 5.342, Vin. 5.140, MP. p.198, VM. p.253.
- 19) Cf. Saddhatissa pp.93-98.
- 20) MP. p.198 5-10 (vipasīdati for pasīdati) Cf. Saddhatissa p.97, Wiltshire pp.243ff and Schlingloff [1] pp.118ff, esp. 133.
- 21) 高崎 184, 注33
- 22) 中村 p.59 注6-7.
- 23) Lamotte 3 1266, note 1. Cf. also p.1247 (la force du maitrī-citta)
- 24) Cf. VM.p.313.21 (nāssa aggi vā visam̐ vā sattham̐ vā kamatīti mettā-vi hārassa kāye).

Cf. also,

yasmim̐ mahārāja khaṇe puggalo mettam̐ samāpanno hoti, na tassa

puggalassa tasmim̄ khaṇe *aggi vā visam̄ vā sattham̄ vā* kamatīti, tass a ye keci ahita-kāmā upagantvā tam̄ na passanti na tasmim̄ okāsam̄ labhanti (MP. p.199 4-8, 16-19, 27-31. Cf.200 6-10 (ta na passanti, na tassa sakkonti ahitam̄ kātum) (中村早島 2. 226 注50-51).

何れにしても『慈心』の功德力は大なりと讃えられ (evam̄ mahānubhāvā mettā (VM. p.313 31)、それに修習する事 (mettā-bhāvanā) は一切の悪を払うと言われる (sabba-pāpa-nivāraṇā mettā-bhāvanā ti. MP. p. 200 12)

- 25) Waldschmidt pp.329-346 (“Das Upasena-sūtra, ein Zauber gegen Schlangengebiss aus dem Saṃyuktāgama), cf. pp.368-370 (Weitere Manuskripte des Schlangenzauber, “maitrī me dhṛtirāṣṭra.”).
- 26) 沼田 p. 62. 『Upasena 物語』によればこの毒蛇は彼の兄 Mahāsena であった。
- 27) 吹田 pp.31-32.
- 28) 奈良 pp.58ff. その pp.60-61には出典箇所の対照表が掲載されている。Cf. also Filliozat p.125 and Rhys Davids [1] pp.185-7 and [2] pp.221-22 2, Spiro pp.263-271.
- 29) Cf. Oldenberg [2] pp.1009-1010. Cf.also Schmithausen [2] p.188.
- 30) 赤沼 pp.572-3, and Malalasekera II pp.1102-1104.
- 31) Schmithausen [1] p.42 note 88.
- 32) Filliozat p.125, Cf. Gonda p.162 and Malalasekera II p.1169.
- 33) Dipavaṃsa p.54 20-25.
- 34) 赤沼 p.615a, Malalasekera II, p.1169、水谷 p.339-40.
- 35) Sīhabāhu 後日談はヒンズ教文献のみならず、アイルランドの伝説に類似を見出す (Hiltebeitel pp.181-191)
- 36) 赤沼 p.165 (Dhanapāla), Malalasekera I, p.58 (Nālāgiri) and Schmithausen [1] pp. 39-40 note 81.
- 37) Cf. 『諸天善神常為守護』(大正 3 p.340a 8)
- 38) Cf. Schlingloff [2] pp.469-470 (die Güte des Königs einen so mächtigen Schutzzauber bildet)

- 39) 赤沼 p.387,
 40) 岡田 p.208.
 41) cf. Schmithausen [1] p.43 note 91.
 42) Brough pp. 227-8.
 43) dhvajāgra に就いては、奈良 p.52 (Pali dhajagga).
 44) For *svastyayana*, cf. Mhv.1.284.17,21, 285.4,10, 14,18,22, 286.4,8,12
 (svastyayanam tad āhuḥ: Jones I p.237 note 1 and p.242 note 1)
 45) 国土安泰靡不相慶。.... 諸天善神常為守護。設有邪魅諸惡鬼神。雖懷損害而不得便 (大正 3 340a-5-9)
 王有慈悲。具四等心。.... 衆邪惡疫。不敢侵近。飢羸困乏。瘦悴無力 (賢愚經 2 大正 4 360b24-29)
 46) Hahn, pp.551ff.
 47) 赤沼 p.721, Malalasekera I 361.
 48) Schayer pp.374ff.
 49) 赤沼 717, Malalasekera I . 432ff.Cf Mhv.2.350.15 maitrāya sphuṭā buddhena na himsanti parasparam
 50) Cf. 大正 4 209c15-16
 51) Cf. tri-sahasri loki gaganam sphuṭa deva-saṃghaiḥ: (LV.416.9)
 gaganam sphuṭam tair nara-nāyakebhiḥ: (LV.367.14)
 52) Cf. DivA 201.24.
 53) Cf.Mhv..1.47.7, 230.2, 240.12, 3.334 10, 341 14.
 54) 中央アジア出土の比定不能、無名の Yoga 教書によれば (Schlingloff [1] pp.35ff.)、Yogin が武器を持って近づく者や獅子、虎等の猛獣に対して『慈心』を発すると、それは拡がって輻射的に相手に達する。その様は Yogin の頭から『慈心力』が乳の円柱乃至樹木 (kṣīra-stambha, kṣīra-vṛkṣa? p.122) の如く現れ出でて、雲の如く拡がって乳の雨 (kṣīra-varṣa) を降らす。相手はこの篠つく乳の雨流 (kṣīra-dhārā) に灌がれるや (sikta-mātra)、怒りや武器を収めて彼の前に跪く (maitrā-vihāriṇam praṇamanti p.127) と言われる。Yogin は又『慈心』を以て一切虚空を充たし、一切衆生をあたかも壁垣 (prākāra) で包み囲む如くするととも言われる (YL p.126)。

Bibliography

- Brough :J.Brough, *Collected Papers* (London 1996).
- Bulke :C.Bulke, "Naissance de Sitā," *BEFEO* 46 1952 pp.107-117.
- Edgerton :F.Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary* (New Haven 1953).
- Feer :L.Feer, *Avadānaśataka* (Paris 1891) p.253.
- Filliozat :J.Filliozat, "Maitreya l'Invaincu," *Laghu-prabandhāḥ* (Leiden 1974) p.123-127.
- Gonda [1] :J.Gonda, *Loka, World and Heaven in the Veda* (Amsterdam 1966)
- [2] :---- "Mitra and Mitra, The idea of "friendship" in ancient India," *Selected Studies VI-1* (Leiden 1991) pp.137-173.
- Gnoli :R.Gnoli, *The Gilgit Manuscript of the Saṅgha-bhedavastu I - II*, (Rome 1977-8)
- Goto :T.Goto, *Die "I, Praesentsklasse" im Vedischen* (Wien 1987)
- Hahn :M.Hahn, *Der grosse Legendenkranz* (Mahajjātaka-mālā) (Wiesbaden 1985)
- Hiltebeitel :A.Hiltebeitel, *The Ritual of Battle* (Ithaca-London 1976)
- Khoroche :P.Khoroche, *Oncethe Buddha was a Monkey* (Chicago-London 1989)
- Lamotte :E.Lamotté, *Le traité de la grande vertu de sagesse*, III (Louvain 1970)
- Law :B.C.Law, *Kshatriya Clans in Buddhist India* (Calcutta 1922)
- Lariviere :R.W.Lariviere, *The Divyatattva: Ordeals in Clas-*

- sical Hindu Law (New Delhi 1981)
- Malalasekera :G.P.Malalasekera, *Dictionary of Pali Proper Names* I - II (London 1960)
- Malinar :A.Malinar, "Wechselseitige Abhängigkeiten und die Hierarchie der Körper," *Tiere und Menschen* (Paderborn 1998) pp.147-177
- Mayrhofer :M.Mayrhofer, *Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch des Altindischen* III (Heidelberg 1976).
- Mylius :K.Mylius, *Wörterbuch Pali-Deutsch* (Wichtrach 1997).
- Oldenberg [1] :H.Oldenberg, *Vorwissenschaftliche Wissenschaft. Die Weltanschauung der Brähmaṇa-Texte* (Göttingen 1919).
- [2] :....*Kleine Schriften* (Wiesbaden 1967).
- Rhys Davids [1] :T.W.and C.A.F.Rhys Davids, *Dialogues of the Buddha* 3 (London 1921).
- [2] :Mrs.Rhys Davids, *Sakya or Buddhist Origins* (London 1928).
- Saddhatissa :H.Saddhatissa, *Buddhist Ethics, Essence of Buddhism* (London 1970)
- Schayer :S.Schayer, *O filozofowaniu Hindusow* (Selected Papers) ed., by M.Meyor (Warsawa 1988)
- Schlingloff [1] :D.Schlingloff *Ein buddhistisches Yogalehrbuch* (Berlin 1966)
- [2] :---"Die Jātaka-Darstellungen in Höhle 16 von Ajanta," *Beiträge zur Indieforschung* (Festschrift E. Waldschmidt) (Berlin 1977) pp. 451-478.
- Schmithausen [1] :L.Schmithausen, *Maitrī and Magic: Aspects of the Buddhist Attitude Toward the Dangerous in Nature* (Wien 1997)
- [2] :----und M.Maithrimurthi, "Tier und Mensch im Bud-

- dhismus," *Tiere und Menschen* (Paderborn 1998) pp.179-226.
- Spiro :M.E.Spiro, *Buddhism and Society* (2nd ed., Berkeley 1982)
- Trenckner :V.Trenckner, *A Critical Pali Dictionary* (Copenhagen 1948)
- Turner :R.Turner, *A Comparative Dictionary of the Indo-aryan Languages* (London 1973).
- Waldschmidt :E.Waldschmidt, *Von Ceylon bis Turfan* (Göttingen 1967)
- Werba :Ch.Werba, *Verba Indoarica* (Wien 1998).
- Wiltshire :M.G.Wiltshire, *Ascetic Figures before and in Early Buddhism* (Berlin-New York 1990)
- Winternitz :M.Winternitz, "Der Sarpabali, ein altindischer Schlangencult, " *Kleine Schriften* (Wiesbaden 1991) pp.5-47.
- 赤沼 :赤沼智善 印度仏教固有名詞辞典 (編) 法蔵館 昭和42年
- 吹田 :吹田隆道 『東トルキスタン有部の読誦經典: *Nagaropamavyākaraṇa* (= *Nagarasūtra*) と魔除け』三康文化研究所年報 20 1988 pp.27-49.
- 原 :原 実『ラーマ物語と桃太郎伝説』足利淳氏博士記念論集 (東京 1978) pp.523-539.
- 中村 :中村元 慈悲 (京都 1956、1994 第11版)
- 中村早島 :中村元、早島鏡正 ミリンダ王の問い (平凡社 昭和39年)
- 奈良 :奈良康明 『パリッタ (Paritta) 呪の構造と機能』宗教研究 213 (1973)、pp.39-68.
- 沼田 :沼田一郎『波羅夷殺戒の一解釈、Upasena 物語』日本仏教学会年報 64 1998 pp.61-7.
- 高崎 :高崎直道 『慈悲の淵源』成田山仏教研究所紀要15 特別号 (仏教文化史論集1) 1992 pp.161-188.

- 水谷 :水谷真城 大唐西域記（中国古典文学大系 22 平凡社 昭和46年）
岡田 :岡田真美子『血の布施物語 [1]』印度学仏教学研究 43 1994, pp.207-211.

Abbreviations

- AS : *Avadāna-śataka* ed. by J.S.Speijer (Bibliotheca Buddhica III 1902-6)
- BEFEO : *Bulletin de l'Ecole Française d'extrême-orient* (Paris)
- DivA : *Divyāvadāna* ed. by E.B.Cowell and R.A.Neil (Amsterdam Reprint 1970)
- IS : *Indische Sprüche* von O.Böhtlingk (Osnabrück Reprint 1966)
- J. : *Jātaka* I - VI ed. by V.Fausbøll (PTS Texts) 1962-64
- JM. : *Jātaka-mālā* ed. by H.Kern (Harvard Oriental Series 1 1943)
- LV : *Lalita-vistara* ed. by S.Lefmann I - II (Halle 1902, 1908)
- MBh : *Mahābhārata* (Poona Critical Edition)
- Mhv : *Mahāvastu* ed. by E.Senart (Tokyo Reprint 1977)
- MP : *Milindapañho* ed. by V.Trenckner (PTS Text) 1962
- PTS : *The Pali Text Society* (London)
- Suv : *Suvarṇabhāsottamasūtra* ed. by J.Nobel (Leipzig 1937)
- Vin : *Vinaya-piṭaka* I - V ed. by H.Oldenbergh (PTS Texts) 1964
- VM : *Visuddhi-magga* ed. by C.A.F.Rhys Davids (PTS Text) 1975
- YL : Cf. Schlingloff [1]

〔Post-script〕

脱稿後、下記の書を一読する機会があった。

M. Maithrimurthi:

Wohlwollen, Mitleid, Freyde und Gleichmut

(Alt-und Neu-Indische Studien, Band50) pp. xxxii—443 (Stuttgart 1999)

本書が「四無量心」の研究に、今後必須且つ不可欠のものとなることに疑いを容かない。

Summary

The Power of *maitri*

Minoru Hara

Inspired by the writings of L.Schmithausen, the present writer here discusses some aspects of *maitrī* as containing miraculous power (*mattānubhāva*), gleaned materials from Buddhist texts— Sanskrit and Pali as well as Chinese.

- (1) *Taisho* 24 743 245 (a Chinese translation of the *Samantapāsādikā*) contains a story in which an ascetic nourishes babies with milk which came out of his thumbs through his intense feelings of love (**mettā, putta-sineha*).
- (2) *Visuddhi-magga* (PTS p.305-6) enumerates 11 *ānisamsā* (good results) attributed to the practice of *mettā*, beginning from *sukham supsti* (sound sleep).
These eleven good results are sometimes repaced by 8 (*Aṅguttara-nikāya* 4.150) or by 5 (*Taisho* 25 211a, *Le grand vertu de sagasse*). Out of these, the following four are have discussed.
- (3) The dispelling of poison (*visa*): The story of the origin of a snake charm (*Upasenasūtra* Waldscmidt, pp.329-46). cf. Schmithausen pp. 11ff.)
- (4) The dispelling of an attack by Weapon (*sattha*), etc. The story of *Sāmāvati* (*Visuddhimagga* 381, *Dhammapadatthakathā* 1.217), that of *Nandiya-miga* (J.385), *Sī habāhu* (*Mahāvamsa* 6.28-30), Buddha's taming of the mad-elephant *Dhanapāla*, etc.
- (5) Divine protection: the story of *Vajrabāhu* (*Saṅghavedavastu* Gnoli 2 pp.18-9=*Taisho* 24 155-156) and that of *Maitrābala*

(Gnoli 2 pp. 20-21, Taisho 24 156: Maitrībala, Jātakamālāi 8 and Mahajjātakamālā 46).

- (6) The dispelling of Fire (aggi) or heated oil (*tatta-tela*): Stories of the Buddha transforming burning charcoal into flowers (Buddhacarita 13.42) and of Uttara cooling boiling oil (*tatta-tela*: Visuddhimagga 381).

(Addenda)

A study of the word *sphuṭa* (BHS) and *phuṭa* (Pali): a semantic analysis of the concept of “being suffused by maitrī.”

(Conclusion)

The practice of *maitrī* (*mettāspḥaraṇa*, *maitrī-bhāvanā*, *mettā-sampanna*) creates “a force-field of protection” (Wiltshire) through its miraculous power.